

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370484

研究課題名(和文) 琉球語と古代語の文法体系を類型論的視点から再構築する研究

研究課題名(英文) Reconstruction of the Ryukyuan and Pre-Modern Japanese Grammar System through Linguistic Typology

研究代表者

荻野 千砂子 (OGINO, Chisako)

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：40331897

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：南琉球石垣宮良方言の謙讓語は、「主語<補語」「主語 補語」の両方で使用できることを明らかにした。謙讓語の機能は補語尊敬が必須であり、同時に主語への尊敬機能もある。古代語の謙讓語にも「主語 補語」の例があり、宮良方言同様、主語に尊敬機能がある可能性を指摘した。宮良方言の指示詞はku/u/kaの三体系を持つ。共通語のコソア指示詞と異なり、人称との連動が無い。単独の物はuriで指示し、複数の物を対比的に指すときにkuriとkariを用いる。対比が原則であり距離は相対的遠近で捉えられる。古代語に聞き手領域の物をアレと指す例がある。古代語も相対的遠近の原則がある可能性を指摘した。

研究成果の概要(英文)：The honorific system of the Miyara dialect in Southern Rukyuan is different from that of the modern Japanese in regard to the humble system. In modern Japanese we use it to show admiration toward the object, so the subject is considered to be of lower status than the object. However, in the Miyara dialect, the humble verb can be used even if the subject is considered to be of higher status than the object. Therefore, it can be concluded that the humble verb has a function to admire both the subject and the object. We can see a similar phenomenon in pre-modern Japanese humble verbs. The demonstrative construction of the Miyara dialect is different from that of the modern Japanese. The ku/u/ka-series demonstratives are used. They are not related to the person. U-series is used for singular, regardless of distance. The distance is relative. The ku and ka-series are used to contrast plural things. In pre-modern Japanese we can find a few similar examples to the Miyara demonstratives.

研究分野：言語学

キーワード：琉球語 敬語 謙讓語 丁寧語 二方面敬語 指示詞 相対的距離 古代語

1. 研究開始当初の背景

(1) 八重山地方の授受動詞の敬語体系は、共通語のような一人称寄りの制約がなく、「上位者 下位者」「下位者 上位者」という敬意の方向を重視する文法を持つことを前年までの研究で明らかにした。しかし、謙譲語については、敬意の方向の理論だけでは説明できない疑問点が残った。宮良方言では主語と補語を同時に敬うことができる二方面敬語が「謙譲語 + 尊敬語」の形式で使用される。「謙譲語 + 尊敬語」の組み合わせは共通語で通常用いないにしても、「主語 < 補語」の人物関係であれば、それほど違和感はない。「田中先輩が井上先生に本を差し上げられた」のような例である。しかし、「主語 補語」の人物関係で謙譲語を用いると、明らかに非文法的な文だと判断される。ところが石垣市の宮良方言の/uyooohuN/(差し上げる)は、/ooruN/(いらっしゃる)を下接して「知事が市長に花を uyoooh-ooruN(差し上げなさる)」と使用することができる。しかも、話者は主語の知事を上位者だと認識する。謙譲語は「下位者 上位者」の敬意の方向の場合に使用するはずであるが、ここでは「知事 市長」という「上位者 下位者」の方向になっており、敬意の方向に逆行することになる。このような「謙譲語 + 尊敬語」の二方面敬語の仕組みが不明であった。

(2) 二方面敬語だけでなく、謙譲語単独でも「主語 補語」を許容する場合がたびたびあった。謙譲語は補語尊敬の機能を持つ敬語のはずである。なぜ、主語が上位者の場合に許容されるのかが不明であった。そこで、謙譲語の単独での文法を明らかにすることが必要であると考えた。謙譲語単独用法が、「謙譲語 + 尊敬語」となったときに、また用法が変わる可能性もある。それぞれの仕組みを個別に考える必要があると考えた。

(3) 共通語では「主語 補語」での謙譲語使用は非文法とされるが、古代語では、「(朱雀帝が斎宮の姫に櫛を)奉り給ふ」のように上位者主語の例がある。従来、朱雀帝と斎宮の二方面に敬語が使われるから良いのだと説明されていたが、八重山地方の謙譲語の仕組みが明らかになれば、上位者主語を許容する理由が別に存在する可能性がある。古代語の「奉り給ふ」と/ujoooh-ooruN/を類型論的に比較することを試みる。二方面敬語は、「補語への尊敬 + 主語への尊敬」という単純な足し算で敬意を付せない可能性がある。

(4) また、謙譲語だけでなく、敬語の仕組みとして共通語を異なるものが他にもあるのではないかと予測した。宮良方言では丁寧語の形態素がなく、聞き手を敬うときにはどのようにするのか疑問を持った。

(5) 指示詞に関しては前年までの研究で、人称との連動がないことを明らかにすることができた。しかし、現場指示でも文脈指示でも、ku系、u系、ka系指示詞のどれもが使える場合が多く、非文法的な例が見つからず、根本的な文法が明らかにできなかった。また、距離が関係していると考えられる用例とそうではない用例があった。どのような場合に距離が関係して、どのような場合に距離が関係しないのかも不明のままであり、研究が滞っていた。

2. 研究の目的

(1) 敬語の研究においては、宮良方言の謙譲語/ujooohuN/の文法記述を行うことを第一の目的とした。共通語では非文となる「主語 補語」の人物関係でなぜ使用が可能になるのかを明らかにする。また、古代語でも、上位者主語を容認する謙譲語の用法が見られるので、宮良方言の/ujooohuN/と古代語を比較しながら、古代語の謙譲語に関して新たな文法理論を提唱することを試みる。

(2) 共通語と異なる丁寧語の仕組みとして、尊敬語の/ooruN/(いらっしゃる)の使用が挙げられる。/ooruN/は「行く・来る・いる」の尊敬語なのだが、動作動詞に下接して補助動詞として用いられると「～なさる」という意味にもなる。ところが、コンピュータに下接すると聞き手への敬意となり、丁寧語相当の機能を担うことが分かってきた。八重山地方には、「です・ます」にあたる形態素がない。聞き手に対する敬意を表す場合に、/ooruN/を代用しているのではないかと考えた。この仕組みを明らかにすることを目的とする。

(3) 指示詞体系を明らかにすることを目的とする。話者は、「これ」相当を/kuri/(これ)と/uri(それ)のどちらでもよいと判断する。例えば、話し手(私)の湯飲みを聞き手が手に持っている場合、私が「それをこっちにちょうだい」と頼むとする。「それ」を/kuri/(これ)で指せる。共通語では「*これをこっちにちょうだい」とは言えない。/kuri//uri/がどちらも使用できる場面が多く、同じ意味のようにも感じていたが、話者は/kuri/の方がはっきりすると説明する。何らかの機能の別はあると考えられるので、根本的な文法を明らかにすることを試みる。

(4) 指示詞体系では、現場指示が共通語と異なることが予想されたので、文脈指示も共通語とは異なる体系を持っていると予想される。よって、文脈指示の文法も明らかにすべく、調査を行う。また、現場指示と文脈指示でどのような類似点や相違点があるのかを明らかにする。

(5) 敬語や指示詞の調査の折に、動詞の活用や時制・アスペクトなど、不明な点が多々あることが分かってきた。基本的な文法枠組の理解は調査において必須である。そのため、活用や時制・アスペクトなど、テーマには直接的に関わらないが、調査には必要な文法事項を記述することとする。

3. 研究の方法

(1) 謙譲語の調査のために、人物関係を年齢別に設定することにした。話し手を私(40歳)とし、聞き手を同級生の花子(40歳)と固定した。動作をする人物として、佐藤さん(85歳)、木村さん(75歳)、井上さん(65歳)、田中さん・村上さん(55歳)、鈴木さん(45歳)という先輩の立場の人たちを設定した。また、私の同級生として、もう一人、香(40歳)を入れた。さらに後輩として、太郎と次郎(35歳)、美保子(30歳)、弘(25歳)等を設定した。どの人物からどの人物への授与を、謙譲語/ujooHuN/(差し上げる)で言えるのか、または、/ujooH-ooruN/(差し上げなさる)でいるのか、個別に検証した。

(2) 人物関係で「主語 補語」となる場合でも謙譲語が使用できることが明らかとなった場合、そのときの敬意の割合がどのようになっているのかを、数値で表すことを試みた。

(3) 古代語の謙譲語を調査する際、用例が多く採取できる『源氏物語』をテキストとして選んだ。作品中の「奉る」と「奉り給ふ」「奉らせ給ふ」の用例を分析し、琉球語の謙譲語と酷似する用法が見られるかを検証した。

(4) 八重山地方石垣宮良方言は琉球語の中でも南琉球語に属する。奄美・沖縄本島の北琉球語とは異なる面があると言われている。そこで、謙譲語の「主語 補語」を許容する用法は南琉球語だけの特徴なのかを検証する。北琉球語でも同様の現象が見られる地域がないか簡易的な調査を行う。

(5) 丁寧語の調査を行う。コンピュータに下接する/ooruN/(～なさる)について調査を行う。通常、丁寧語は聞き手への敬意なので、主語は関係ない。しかし、宮良方言の丁寧語相当の用法には、主語との関連がありそうなので、主語が無生物や動物の場合でも、所有者が上位者の場合にどうなるか等、主語の背後に隠れた情報も操作して調査をする。

(6) 指示詞に関しては、地道に談話資料をとり、用例数を増やしていくことで帰納的分析を行う。これまでの調査で、文脈指示詞はu系指示詞(共通語でのソ系指示詞に相当す

る)をほぼ用いることが分かっている。共通語ではア系指示詞を用いる記憶指示、例えば「あれは楽しかったね」のような場合でも、u系を用いる。共通語では「*それは楽しかったね」は言えない。記憶指示の中でも、聞き手と共通の記憶なのか、自分一人だけの記憶なのか、今も存在する物を指すのか、今は無くなった物を指すのか等、場合分けをした用例を作成することとする。また、現場指示と連動して文脈指示も解釈できるのか試みる。

4. 研究成果

(1) 石垣宮良方言では「謙譲語+尊敬語」の二方面敬語があり「主語<補語」のみならず、「主語 補語」の人物関係で使用できる。人物関係を指定した詳細な調査の結果、謙譲語単独でも「主語 補語」で使用できることが明らかになった。謙譲語は、補語尊敬が必須であり、同時に主語へも尊敬機能があると結論づけた。謙譲語単独で主語尊敬と補語尊敬の機能を持つ。

古代語において、主語も補語も上位者であるのに、「謙譲語+尊敬語」の尊敬語が用いられず謙譲語のみの用例が見られることがある。この現象は、従来は異文検証を行うことにより、本文より異文が「正しい」と認識されていた現象である。しかし、宮良方言と同様に、謙譲語に主語尊敬機能があると考えれば、納得がいく結論が導き出せる。宮良方言の謙譲語文法は古代語の謙譲語文法を考察する際、類型論的に適用できるのではないかと考えている。

しかし、明らかにできなかった点もある。主語が話し手の私(40歳)の場合に、「私 木村さん(75歳)」の授与を、/ujooHuN/(差し上げる)で言える。この場合は、主語への尊敬機能(自分敬い)は無いと話者は断定する。敬意の割合を数値化した場合、確かにゼロになった。/ujooHuN/の機能として、補語尊敬だけでなく、主語尊敬も持っているとしたら、なぜ一人称主語で敬意がゼロになるのか説明ができない。同様のことは、主語が後輩になった場合でも出てきた。しかし、数値化をすると、例えば「弘(25歳) 田中さん(55歳)」の授与のとき、「1:9」という敬意の割り振りがなされた。主語が他人の場合、ゼロにはならないことがある。この仕組みをどう考えればよいのか、引き続き研究を続けることとする。

また、北琉球語の喜界島で簡易的な調査を行った。その結果、喜界島でも「主語 補語」の謙譲語が使用できることが分かった。ただし、その仕組みが宮良方言と同様であるかどうかは未調査である。今後、引き続き調査を行う。

(2) 石垣宮良方言での聞き手への敬意について調査を行った。聞き手への敬意は、共通

語では丁寧語に相当する。宮良方言では丁寧語を表す形態素がない。そのため、尊敬動詞/ooruN/を用いて丁寧語として使用している。調査の結果、丁寧語の用法が派生するのは、コピュラ/jaru/に/ooruN/が下接したときのみであることが分かった。加えて、主語に関する制限があることも明らかになった。例えば、逃げた牛を捕まえてくれた先輩に「これは、私の家の牛です」と伝えるとき、「私の家の牛 jar-ooruN」とは言えない。ここで、もし/jar-ooruN/を使うと、「自分敬い」になるという。しかし、もし牛が、知事から飼育を委託されている牛であったら、「これは知事の牛 jar-ooruN」と言うことができる。これは、聞き手である先輩への敬意とあると話者は説明する。先ほどの違いは、主語の「牛」の所有者である。聞き手尊敬の丁寧語の用法は、主語にも何らかの尊敬要素を含んでいないと使用できない。語彙と文法との間で計算が必要になっていることが明らかとなった。この現象について、口頭発表は行ったが、まだ論文文化をしていないので、今後、論文文化を行う予定である。

(3) 指示詞に関しては、最初の2年間で談話を採取して分析していたが、ku/u/ka系指示詞の区別を明らかにすることができなかった。そこで平成27年度には以前試みていた場面設定調査に戻すことにした。場面を私が作り、その中で、どのような指示詞が最も使いやすいかという調査を行った。その結果、話者から「遠くの物を普通はkari(あれ)で指すけど、物が一つしかなかったら、uri(それ)でも言うことができる」という説明を受けた。この一言が契機となって調査が進み、宮良方言指示代名詞の仕組みの概要を明らかにすることができた。

宮良方言の指示代名詞はku/u/kaの体系を持つ。しかし、共通語のような近称・中称・遠称という距離による区別や人称との連動がない。距離に無関係で単独の物を指すときにuri(それ)を使用する。重要な点は、距離に関係なく単数のものはすべてuriで指せる、という点である。例えば、空に一つ輝く光があるとす。「あれは何だ!」という場合、uriで指すことができる。もちろんkari(あれ)を使ってもよい。単数で近い物を指す場合は、uri(それ)でもkuri(これ)でもよく、遠い物を指す場合は、uri(それ)でもkari(あれ)でもよい。

しかし、近距離の複数ある物を対比して指すとき、uriとkuriの両方が現れる。自分から等距離の物をuriとkuriで指し、「これとこれ」という意味になる。遠い物二つを対比するときには、uriとkariで指し、「あれとあれ」という意味になる。場における対比構造がある場合に、u系指示詞に加えて、ku系やka系指示詞を用いることになる。

また、遠近は物理的な距離ではない。例えば、目の前に1.5メートル四方のガラスケー

スがあったとする。ガラスケースの中に時計があるが、自分は手に触れることができず、見るためには店員に頼むしかないとす。物理的な距離としては、自分から遠くはない。まず、自分の目の前の時計を指さし、次に店員側にある時計を指さし、「これとそれを見せて下さい」と頼む場合、uri(それ)とkari(あれ)を使用することができる。店員側にある時計は、共通語では聞き手領域にあるため「それ」を使用する。しかし、宮良方言では、自分に近い側の時計はuri(それ)で指し、uriに対して遠い方の時計をkari(あれ)で指すことができる。つまり、物理的な距離ではなく相対的な距離で遠近を捉えることが明らかとなった。

鎌倉時代には、聞き手領域にある物をアレと指す例があり、相対的遠近という観点から、今後古代語との対照研究を行えることを指摘した。宮良方言は、現場指示用法と文脈指示(記憶指示用法を含む)が、ほぼ同じ理論で扱える可能性も指摘した。これらは、2015年度秋季大会(日本語学会)で発表を終えたばかりであり、今後、論文文化を行う予定である。

(4) 談話資料を分析していく中で、これまで報告がない動詞の活用の実態や、テンス・アスペクトの用法を明らかにした。特に黒島方言のテンス・アスペクトに関しては、石垣方言とは異なる独自の形態素があることを明らかにした。報告書として簡易的な論文にまとめた。ただし、アスペクトに関しては、まだ不明な点も残っているので、引き続き研究を行うこととする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

原田走一郎・荻野千砂子

沖縄県黒島方言の音節一覧・助詞・談話資料、平成27年度危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した調査研究、文化庁委託事業報告書、琉球大学、査読無、pp.145-183、2016

荻野千砂子

八重山語黒島方言のテンス・アスペクト、琉球諸語記述文法 消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法構造に関する基礎的研究、査読無、pp.90-99、2016

荻野千砂子

沖縄県竹富町黒島方言、危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究、文化庁委託事業報告書、国立国語研究所、査読無、pp.87-94、2015

荻野千砂子
黒島方言の文法スケッチ - アクセント・動詞・
形容詞の小考察 - 、琉球諸語記述文法、査読無、
、pp.75-99、2015

荻野千砂子
沖縄県黒島方言、危機的な状況にある言語・
方言の実態に関する調査研究、文化庁委託事業
報告書、琉球大学、査読無、pp.103-115、2014

荻野千砂子
八重山地方宮良方言の謙譲語ウヨーフンに関
して、人文社会科学を主体とした先端的琉球・
沖縄学の次世代研究者の育成・研究推進プロジ
ェクト成果報告書、査読無、vol.2、pp.243-246、
2013

〔学会発表〕(計9件)

荻野千砂子
南琉球八重山地方石垣宮良方言の指示代名
詞、2015年度秋季大会日本語学会、2015年
10月31日、山口大学(山口県山口市)

原田走一郎・荻野千砂子
黒島方言のヴォイス・アスペクト、科研費・
国語研共同研究プロジェクト合同発表会、
2015年8月21～23日、国立国語研究所(東
京都立川市)

荻野千砂子
八重山石垣方言の敬語の仕組み、危機方言第
1回プロジェクト研究発表会、2014年9月
14日、国立国語研究所(東京都立川市)

荻野千砂子
南琉球八重山石垣宮良方言の謙譲語 - お目にか
かる・ご案内する、東アジア日本語教育・日
本文化研究学会、2014年度国際学術大会2014
年8月23日、崑山技科大学(台南市・台湾)

荻野千砂子
二方面敬語を作る謙譲語 - 石垣宮良方言と
古代語 - 、第96回日本方言研究会2013年5
月31日、大阪樟蔭女子大学(大阪府東大阪
市)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0件)
○取得状況(計 0件)

〔その他〕

ホームページ等：無

(1)研究代表者 荻野千砂子
(OGINO Chisako)
福岡教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：40331897